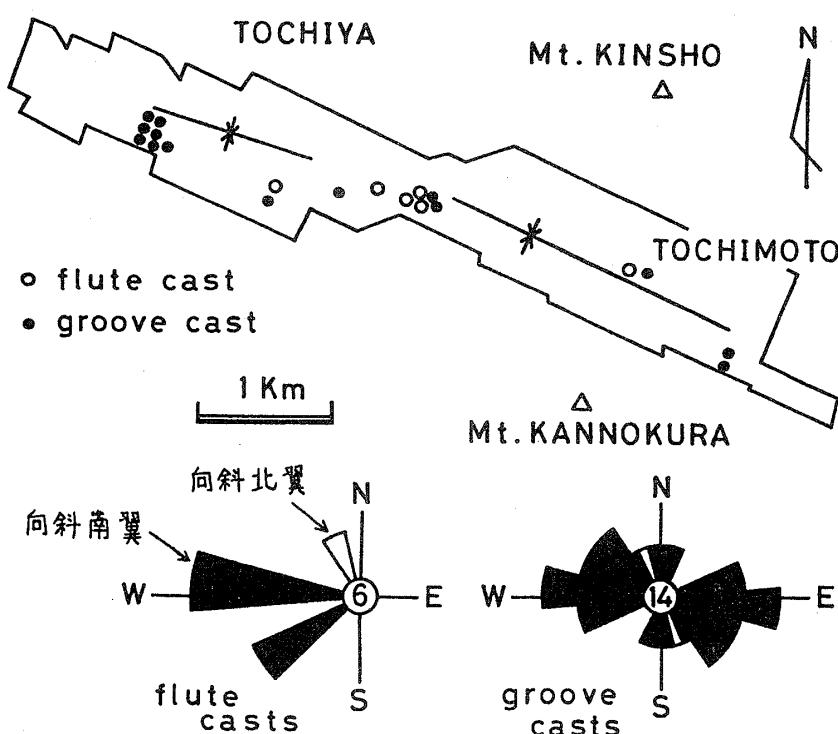


## 170 埼玉県寄居町南方、柄谷層（跡倉層相当層）の古流向

長沼幸男（大宮市立馬宮中）・加藤尚裕（埼玉大学・教育）  
関東山地北東縁の寄居町南方には、跡倉層に対比される柄谷層が、  
西北西—東南東方向に延長約9km・幅約1kmにわたって分布する。

筆者らは、官ノ倉山陵線の北側一帯において、ソール・マークによる古流向の解析を行った。調査地域内の柄谷層は、下部に跡倉様の礫岩、中・上部に砂岩および砂岩泥岩互層が累重し、分布の伸長方向に軸を有する向斜構造を形成している。本層は全般的に露出が悪い上に、沢が地層の走向方向にほぼ直角に流れているため、測定されたソール・マークは、フルート・カストが6、グルーブ・カストが14にすぎない。第1図は、向斜軸のプランジ補正を施していないが、主流向は、向斜北翼ではNNW方向（あるいはNNW-SSE），向斜南翼ではW方向（あるいはW-E）を示している。なお、向斜軸は、本層の分布の幅の増大方向や岩相の分布状態、更には第1図に見られるような向斜北翼と南翼での古流向の食い違い、西隣の登谷山隆起地塊の影響などから、東方に沈下している可能性が強い。資料は少ないが、東部の柄本付近のデータによれば、プランジは東方へ約15°である。したが



第1図 官ノ倉山陵線北側の柄谷層の古流向

って、プランジ補正を施せば、第1図の古流向は、より地層の分布の伸長方向に近いものとなり、大局的には、ESE→WNWのlongitudinal currentとみなされる。

なお、本層は堆積学的に種々の点で、山中地溝帯白亜系や西南日本中軸部の白亜系に類似する。